

研究ノート

初期鉄器時代のミケーネ — 埋葬資料の検討 —

高橋 裕子

はじめに

ミケーネ文化の中心地であったミケーネは、ミケーネ文化崩壊後完全に放棄されてしまったわけではない。ミケーネ文化崩壊直後の後期青銅器時代ⅢC期に関しては、ある程度の資料が確認されている¹⁾。ミケーネ時代と比べればその規模は比較にならないが、この集落における人的活動は途切れることなく営まれていた。

さらに、その後の初期鉄器時代に関してもミケーネの集落からは遺物や遺構が出土している。ただし当該期のミケーネは既に弱小勢力へと転落した存在であるため、アルゴリスの初期鉄器時代研究において中心的な役割を与えら

れることはなかった。

しかし、初期鉄器時代以降のアルゴリスを論究していく上で、ミケーネ時代においてはギリシア随一の勢力を誇ったミケーネがなぜ再び発展することができなかったのか、という問題を避けて通ることは不可能であろう。本稿はそのための基礎的作業の一部である。

ミケーネにおける初期鉄器時代に関する主要資料は、埋葬関連と宗教関連の二種類に大きく分けることができる。これら二つの内、宗教関連の資料に関しては別稿を期すこととし、本稿においては埋葬資料に焦点を当て、当該期のミケーネひいてはアルゴリスの社会を考えるための一助としたい。

埋葬資料の検討

筆者が確認しえた初期鉄器時代（亜ミケーネ期～後期幾何学文様期）の埋葬資料をまとめたものが、「ミケーネの初期鉄器時代の墓一覧」である。それをもとに、以下、特徴的な事例を記していきたい。

1) 墓の数

発掘報告での記載が不明確なために数が把握できない事例もあり、確実な総数は不明であるが、現今の資料状況では初期鉄器時代を通して三〇基を超える程度、最大限に多く見積もっても四〇基に達するか否かであろう。

ミケーネ時代の集落が初期鉄器時代には完全に放棄された事例もあるので、居住されていただけでも注目にあたいるが、しかし、アルゴリスで初期鉄器時代に繁栄したアルゴスやアシネなどの墓の数と比較すると少数である。それだけ人口は多くなく、集落として発展していなかったことを示唆しているよう。

2) 通時的な墓の数の変化

時期ごとの墓の数の変化を見てみると、亜ミケーネ期は僅少であるが、次の原幾何学文様期は可能性があるものを



図1 原幾何学文様期の土器
（城塞の家区域「23」の墓出土、出典：Desborough 1973, pl.34:b）



図2 後期幾何学文様期の土器
(先史時代の墓域 G.II 墓出土、出典：Wace, Stubbings,
Rowe, Desborough & Wace 1954, pl.45:53-337)

含めると九〇基が確認されている（図1）^③。原幾何学文様期に関する数字の増加はタイムスパンが長いことも一つの大きな要因であろうが、他の時期に比べれば多少なりとも人口が多かったとも推察されよう。

ところが初期幾何学文様期および中期幾何学文様期においては、再び墓の数は減少する。フォーリーはそれを単なる偶然と見なしているが、この頃ミケーネ周辺地域はかなり過疎化していた可能性は否定できない。

その後、後期幾何学文様期になるとまた墓の数は増加するが、しかしやはり大量の資料が出土しているとは言い難い（図2）^⑤。

周知の通り、ギリシアの初期鉄器時代における各集落の墓の数は、後期幾何学文様期になると増加もしくは急増する傾向があると指摘され、そしてそれがポリスの成立と結びつけられて議論されてきた。かかる観点から述べるならば、ミケーネの場合には、独自のポリスを形成できなかった集落の事例として論究するにあたいしよう。

3) 墓域の非形成

ほとんどの墓が廃墟化したミケーネ時代の建物にいく数基で発見されていることは、ミケーネの初期鉄器時代の埋葬習慣における主要な特徴の一つである。たとえばライオ

ン門北東地点のように墓群を形成していると見なし得る場所も存在するが、多くは単独もしくは数基で出土している。

これは、集落としてのまとまりを欠いた状態であったことを示唆しているよう。埋葬するに際してはどの場所で行うか、という事柄に関して集落としてのルールや方針が存在しない限り、墓域や墓地は形成されない。初期鉄器時代のミケーネは、集落全体の墓域や墓地が成立しえない状況にあった。

4) 墓の形態

墓のタイプはすべて単葬墓である。竪穴を掘って四辺の壁に板状の石をあてがう箱形石棺墓、礫や石を積み上げて壁を覆う積石箱形石棺墓（図3）、単に竪穴を掘っただけの土壇墓が大半を占めている。他には土器棺墓も存在した。

ところでミケーネ文化崩壊直後の後期青銅器時代ⅢC期には、ミケーネおよびその周辺地域には三種類の墓のタイプが存在した。一つ目が複数の遺骸を葬る横穴墓（岩室墓）で、これらはミケーネ時代以来の墓が継承されてⅢC期にも使用されたものである。二つ目が単葬墓で、石棺墓や土器棺墓などが含まれる。横穴墓と単葬墓は両者ともに土葬であり、アクロポリス周辺一帯から発見されている。

これに対して三つ目の墳丘墓は火葬を伴っており、アクロポリスからは3kmほど離れたハニアから発見されてい



図3 積石石棺墓

（城塞の家区域「21」の墓、出典：Desborough 1973, pl.33:b）

る。後期青銅器時代ⅢC期のみに使用された特殊な墓で、アクロポリス一帯の土葬墓とは明らかに一線を画す存在である。^⑧

すなわち、ミケーネ文化が崩壊した直後、ミケーネおよびその周辺地域の人々は、次の三つのグループに区分することが可能であろう。①ミケーネ時代以来の横穴墓を受け継いだ人々、②単葬墓を採用した人々、③両者とは距離を置いた場所に火葬を伴う墳丘墓を造営した人々である。

そして三つの墓のタイプの内、横穴墓と墳丘墓はⅢC期で終焉を迎え、それ以降は消滅する。その後初期鉄器時代に入ってから、単葬墓のみが作られた。

ミケーネ文化崩壊後のⅢC期から初期鉄器時代にかけてはミケーネの集落に大規模な社会変動があったことは想像に難くない。墓の形態から推し量るのであるならば、ⅢC期の三つのグループの内、アクロポリス周辺の居住者で、しかもミケーネ時代以来の横穴墓を受け継ぐことがなかった人々、すなわち単葬墓を採用していた人々のグループが、初期鉄器時代に入ってから集落の中核的な存在であったと推察されよう。^⑨

5) 埋葬方法

ミケーネの初期鉄器時代は土葬が支配的であり、遺体が^⑩

安置された姿勢が判明している場合はすべて屈葬である。

初期鉄器時代のアルゴリスにおいては、遺骸の姿勢は二種類に区分される。アルゴスに代表される屈葬と、アシネの伸展葬である。アルゴスとアシネは初期鉄器時代でも早い時期、すなわち原幾何学文様期から既にライバル関係にあったと推測され、アシネはアルゴスとは別個の独自の特性を有していた。^⑪

これら二つの文化的特徴の内、ミケーネはアルゴスの側に属する。初期鉄器時代の勢力関係から推察すれば、アルゴスにとってミケーネは物の数に入る存在ではなかったであろう。そして文化的にも影響を受けていた。^⑫

6) 墓の位置

ミケーネ時代の城塞の内部（すなわち城壁の内側）からは、亜ミケーネ期と原幾何学文様期、すなわち初期鉄器時代でも前半期の墓しか発見されていない。それに対して後半になると、城壁の外側が選択されるようになった。

おそらくかかる現象の背景には、城塞に対する価値観の変化が存在するのではないか。^⑬ミケーネ時代の祖先たちが築き上げた城塞に畏敬の念が払われるようになったのか、またはミケーネ文化崩壊による混乱期から時間が経過するにつれて新たな意味合いでアクロポリスが尊重されるよう

初期鉄器時代のミケーネ（高橋）

になったのか、その具体的内容は不明であるが、おそらくこの事柄も初期鉄器時代におけるミケーネの集落における社会変化と関係があらう。

おわりに

埋葬資料による限り、初期鉄器時代のミケーネに関して集落としてのまとまりを想定することは難しい。わずかながらも人々が居住していたことは確実であるが、組織だった体制は最後まで整えられることはなかったであらう。繁栄の徴候を示すことなく、アルゴスによるポリス誕生という地域全体の政治的再編の波に飲み込まれていく。

後稿にてミケーネの初期鉄器時代における宗教関連の資料を検討し、当該期のこの集落の全体像を提示することを目指したい。

註

- (1) 拙稿「青銅器時代終末期におけるミケーネ」『西洋史研究』新輯四四号、二〇一五年、七五—九〇頁（以下、拙稿二〇一五と略記）。
- (2) 初期鉄器時代のアルゴリスの集落における墓に関しては、Hägg 1974, Foley 1988, esp. 268, Table 1. また、亜ミケーネ期と原幾何学文様期に関しては、Takahashi 2009, Chap. 2.
- (3) ヘイグはミケーネにおける原幾何学文様期の墓を一二ノ二〇基と記している（Hägg 1974, 68）。ただし、ヘイグは筆者が表に含めていないものも墓の数に組み入れている。たとえば、一九二〇年にウェイスが発掘した原幾何学文様期の土器に関して（Desborough 1952, 210, Pl. 28B, Wace, Stubblings, Rowe, Desborough & Wace 1954, 265）、墓の存在を示すものと解釈している（Hägg 1974, 68）。
- またフォーリーは、一二ノ二〇基というヘイグの数字をそのまま引用している（Foley 1988, 42, n. 53, 267, Table 9, 268, Table 11）。
- (4) Foley 1988, 43.
- (5) 本稿の一覧では後期幾何学文様期の墓は可能性があるものを含めても四基であるが、フォーリーは六ノ八基と推測している（Foley 1988, 42, 267, Table 9, 268, Table 11）。またスノッドグラスは一九五二年に横穴墓の調査に際して発掘された後期幾何学文様期の資料を「横穴墓の再利用」として埋葬資料に含めているが（Snodgrass 1971, 204）、当該期に埋葬が行われた痕跡は確認されていないので、筆者は一覧には含めていない。この資料に関しては、PAE

1952, 1955, 465-472, PAE 1953, 1956, 207-209. ちうび cf. Antonaccio 1995, 47-48.

- (6) 拙稿「初期鉄器時代におけるアテネとアッティカ」『史学雑誌』第一一〇編第一号、二〇〇一年、三九—四二頁。
- (7) 拙稿二〇一五。
- (8) 拙稿「アルゴリスの後期青銅器時代ⅢC期における墓制と社会—火葬墓を伴う墳丘墓の資料紹介を中心に」『西洋史研究』新輯第四八号、二〇一九年、五七—五九頁。
- (9) アルゴリスにおいては、初期鉄器時代に入ってから横穴墓は姿を消し、単葬墓が主流になるのは、他の集落においても一般的に見受けられる現象である。Cf. Takahashi 2009.
- (10) 火葬の可能性が指摘された資料もあるが、他の研究者からは批判的な意見が提出されている（Foley 1988, 42, 217）。
- (11) 拙稿「ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡（3）アシネ」『マテシス・ウニウエルサリス』第一九号第一号、二〇一七年、一二頁。
- (12) フォーリーは、前八世紀の土器に関して同様の事柄を述べている（Foley 1988, 64）。
- (13) Cf. Foley 1988, 43.

略記一覧

- AE *Αρχαιολογική Εφημερίς*
 AR *Archaeological Reports*
 EA *Εφημερίς Αρχαιολογική*
Ergon *Το Έργον της Αρχαιολογικής Εταιρείας*
 PAE *Πρακτικά της εν Αθήναις Αρχαιολογικής Εταιρείας*
 WBM *Well Built Mycenae: The Helleno-British Excavations within the Citadel at Mycenae 1959-1969*

文献一覧

- Alden, M.J. 1981: *Bronze Age Population Fluctuations in the Argolid from the Evidence of Mycenaean Tombs*, Göteborg.
 — 2000: *WBM 7: The Prehistoric Cemetery: Pre-Mycenaean and Early Mycenaean Graves*, Oxford.
 Antonaccio, C.M. 1995: *An Archaeology of Ancestors: Tomb Cult and Hero Cult in Early Greece*, London.
 Cavanagh, W. & C.Mee 1998: *A Private Place: Death in Prehistoric Greece*, Jonsered.
 Coldstream, J.N. 2008: *Greek Geometric Pottery*, updated second edition, Bristol.
 Courbin, P. 1966: *La Céramique Géométrique de l'Argolide*, Paris.

Δανηλίδου, Δ. 2008: *Ανασκαφές Μυκηνών*, II. *Το «Εργαστήριο» των Μυκηνών*, Αθήνα.

Desborough, V.R. 1952: *Protogeometric Pottery*, Oxford.

— 1964: *The Last Mycenaeans and their Successors: An Archaeological Survey c.1200 – c.1000 B.C.*, Oxford.

— 1973: Late Burials from Mycenae, *BSA* 68, 87-101.

Ευαγγελίδης, Δ. 1912: Εκ τῆς Μυκηνῶν Γεωμετρικῆς Νεκροπόλεως, *AE* 1912, 127-141.

Foley, A. 1988: *The Argolid 800-600 B.C.: An Archaeological Survey: Together with an Index of Sites from Neolithic to the Roman Period*, Göteborg.

Frickenhans, A., W.Müller & F.Oelmann 1912: *Tiryns I*, Athen.

Hägg, R. 1974: *Die Gräber der Argolis: in Submykenischer, Protogeometrischer und Geometrischer Zeit*, Uppsala.

Hope Simpson, R. & O.T.P.K.Dickinson 1979: *A Gazetteer of Aegean Civilisation in the Bronze Age*, vol.I: *The Mainland and Islands*, Göteborg.

Ιακωβίδης, Σ.Ε. 2006: *Ανασκαφές Μυκηνών*, I. *Η Βορειοδυτική Στοιβάδα*, Αθήνα.

- Kilian-Dirlmeier, I. 1984: *Nadeln der Frühhelladischen bis Archaischen Zeit von der Peloponnes*, Prähistorische Bronzefunde XIII:8, München.
- Lemos, I. 2002: *The Protogeometric Aegean: The Archaeology of the Late Eleventh and Tenth Centuries BC*, Oxford.
- Mason, D.J. 2013: The Date of the Tomb of Clytemnestra, *BSA* 108, 97-119.
- Mountjoy, P.A. 1993: *Mycenaean Pottery: An Introduction*, Oxford.
- 1999: *Regional Mycenaean Decorated Pottery*, Rahden.
- Mylonas Shear, I. 1987: *The Panagia Houses at Mycenae*, University Museum Monograph 68, University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Onasoglou, A.A. 1995: *H Onkia tou Taïou tou Tpaúōōv otis Muxhves*, Athens.
- Perrot, G. & Ch.Cnipiez 1898: *Histoire de l'Art dans l'Antiquité*, vol.VII, Paris.
- Snodgrass, A.M. 1971: *The Dark Age of Greece*, Edinburgh.
- Styrenius, C.-G. 1967: *Submycenaean Studies*, Lund.
- Takahashi, Y. 2009: *Ta Ethya Taphs styn Apyōidōc: Airo tyn Metavarkopikē ēōs kai tyn Iprotyōmyepukhē Iepiōdo*, Ph.D thesis, University of Athens.
- Taylor, W.D. 1981: *WBM 1: The Excavations*, Warminster.
- Tournavitiou, I. 1995: *The Ivory Houses' at Mycenae*, *BSA Supplementary Volume* 24, London.
- 2006: A Mycenaean Building Reconsidered: The Case of the West House at Mycenae, *BSA* 101, 217-267.
- Wace, A.J.B. 1954: Mycenae, 1953, *JHS* 74, 170-171.
- Wace, A.J.B. & V.R.d'A.Desborough 1956: Mycenae 1939-1955, *BSA* 51, 103-131.
- Wace, A.J.B., W.A.Heurtley, W.Lamb, I.B.Holland & C.A.Boethius 1921/1922-1922/1923: Excavations at Mycenae (corrected title: The Report of the School Excavations at Mycenae, 1920-1923), *BSA* 25, 1-434.
- Wace, A.J.B., M.Pakenham-Walsh, W.Taylor, A.G.Woodhead, V.R.d'A.Desborough, H.Taylor 1955: Mycenae 1939-1954, *BSA* 50, 175-250.
- Wace, A.J.B., F.H.Stubbings, K.R.Rowe, V.R.d'A.Desborough & E.B.Wace 1954: Mycenae 1939-1953, *BSA* 49, 231-298.

(本字兼任講師)

ミケーネの初期鉄器時代の墓一覧

ミケーネの初期鉄器時代の墓に関して、1) 時期、2) 墓の形態、3) 埋葬方法、4) 副葬品、5) 報告文献、6) 他の文献、の順番に記載していく。

「報告文献」の項目には主要報告を記載し、概報は「他の文献」に含めることとする。また概報の類は、雑誌名、号数、出版年、頁数などの記載にとどめ、執筆者やタイトルは省略する。

初期鉄器時代のミケーネ（高橋）

I：城壁内の墓

【ライオン門北東の墓群】

ライオン門から北東方向に位置する建造物群で発見された墓である。

・1891年に発掘された墓群

1891年にツングスによって報告された墓群である。廃墟化した建造物から発見された。その建物はおそらく後期青銅器時代 IIIA 期から IIIC 期まで使用されていたと推測されている⁽¹⁾。その後放棄され、初期鉄器時代に入ってから墓が造られた。

4基の墓が同じ一室から、そして他の2基が別の部屋から発掘された。

1) 1基は原幾何学文様期、他は不明⁽²⁾

2) 箱形石棺墓⁽³⁾ 6基

ツングスの報告には、2基の墓の大きさのみが記載されている。1基が0.52×0.42m 前後、もう1基が0.60×0.45m である⁽⁴⁾。

3) 土葬

すべての墓から子供の遺骨が発見された。

4) 2基の墓から副葬品が発見された。1基の墓からは青銅製のピン (βελόνη) 1本が、別の1基からは青銅製のピン (βελόνη) 1本と土器2個が発見された⁽⁵⁾。

他の4基からは副葬品は発見されなかった。

5) *EA 1891*, 1891, 27-28.

6) Desborough 1973, 98-99, Hägg 1974, 65-66, Lemos 2002, 79, 160, n.115, Ιακωβίδης 2006, 3.

・1984年に発掘された墓

1984年に部屋 I2 で発掘された墓である⁽⁶⁾。

1) 不明

原幾何学文様期の可能性が推察されているが⁽⁷⁾、確実とは言えない⁽⁸⁾。

2) 箱形石棺墓

3) 土葬

乳児の遺骨が発見された。

4) なし

5) Ιακωβίδης 2006, 27.

6) *PAE* 1984, 1988, 236.

【南の家の墓】

1) ?

建造物が放棄された後に作られた墓ではあるが、副葬品が存在しないため詳細な時期を確定するのは不可能である。

2) 箱形石棺墓

小型であり、大きさは 0.52×0.30m、深さは 0.30m である。床面には小石が敷かれていた。

3) 土葬

被葬者は子供である。

4) なし

5) Wace, Heurtley, Lamb, Holland & Boethius 1921/1922-1922/1923, 88-90.

6) Hägg 1974, 66-68.

【城塞の家区域 Γ21 の墓】

W.D. テイラー (Taylour) による 1964 年の発掘で、城塞の家区域 (Citadel House Area) の Γ21 区から発見された遺構である⁽⁹⁾。

1) おそらく原幾何学文様期⁽¹⁰⁾

2) 積石箱形石棺墓

墓内部の計測で 1.00×0.50m 前後である。北東—南西を主軸としている。細長い板状の礫などで蓋をされていた。それらの蓋石の下側には、火を受けた痕跡があった。

墓壁は中型または小型の礫により構築されており、蓋石同様に火の痕が認められた。床面ははっきりとは確認されていない。

3) 土葬、横臥屈葬

横臥屈葬で、顔面はおそらく南西方向に向けられていた。多くの骨片が火を受けていた⁽¹¹⁾。

被葬者は 23 歳前後の女性と報告されている⁽¹²⁾。

4) 鉄製ピンの破片⁽¹³⁾

頭蓋骨付近から発見された。

5) Desborough 1973, 91-92.

6) *AR 1964-1965*, 1965, 10-11, *BCH* 89, 1965, 715-717 (esp.717), *AD* 20, B'1, *Chronika: 1965*, 1967, 164-165, Hägg 1974, 66, 68, 70, 114-115, Taylour 1981, 36, 40, Kilian-Dirlmeier 1984, 80, no.317A, Lemos 2002, 160, n.115.

【城塞の家区域 Γ23 の墓】

W.D. テイラーによる 1964 年の発掘で、城塞の家区域の Γ23 区から発見された遺構である。

1) 原幾何学文様期

2) 土壙墓⁽¹⁴⁾

2 個の大型の板石で蓋をされていた。内側の計測で 1.10 × 0.60m 前後の大きさで、北東—南西方向を主軸とする。

3) 土葬、仰臥屈葬

被葬者は 42 歳の女性と報告されている。頭蓋骨は北西の隅に置かれており、肋骨は損傷が激しい。脚部の骨は大半が残っていなかった。

4) 土器 2 個、青銅製の球が付いた鉄製ピン 1 本、青銅製指輪 1 個

頭蓋骨のすぐ左側から、アンフォラとその口を塞いでいたレキュトスが発見された。鉄製のピンは右側の肩付近に置かれていた。

5) Desborough 1973, 91-93.

6) *AR 1964-1965*, 1965, 10-11, *BCH* 89, 1965, 715-717, *AD* 20, B'1, *Chronika: 1965*, 1967, 164-165, Hägg 1974, 66, 68, 70, 103, Taylour 1981, 37, Kilian-Dirlmeier 1984, 72-73, no.249, Lemos 2002, 17, 73, 89, 107, 116, 160, n.115, 233.

【城塞の家区域 Γ31 の墓】

W.D. テイラーによる 1964 年の発掘で、城塞の家区域の Γ31 区から発見された遺構である。後期青銅器時代 IIIC 期後期と推測される南の家の壁 (retaining wall) の一部を壊して、構築されている⁽¹⁵⁾。

Γ31 区からは他にも頭蓋骨の破片 2 個が発見されており、これ以外にも墓が存在した可能性は否定できない⁽¹⁶⁾。

1) 亜ミケーネ期（もしくは亜ミケーネ期から原幾何学文様期への移行期）⁽¹⁷⁾

2) 積石箱形石棺墓⁽¹⁸⁾

3 個の大型の板石で覆われており、床には小石が敷かれていた。内部の計測で 1.10 × 0.36-0.42m の大きさである。北—南方向を主軸とし、

北側は壁の下に位置している。

3) 土葬

被葬者は8～9歳の子供であり、おそらく女性と推測されている。頭蓋骨が北側に置かれた仰臥であるが、脚部の姿勢は不明である。

4) 土器7個、青銅製アーチ状フィブラ3個、青銅製ピン2本、青銅製指輪1個

5) Desborough 1973, 91, 94-98.

6) *AR 1964-1965*, 1965, 10, *BCH* 89, 1965, 717, *AD* 20, B'1, *Chronika: 1965*, 1967, 165, Styrenius 1967, 129, 134, 136, Hägg 1974, 65, 66, 70, 111, Taylour 1981, 37, 53, Kilian-Dirlmeier 1984, 67, nos.184 and 185, Mountjoy 1993, 147, Mountjoy 1999, 62, 192, nos.453, 457 and 458, 194, nos. 462 and 465, Lemos 2002, 13, 160, 233.

II：城壁外の墓

【アクロポリス北側】

1893年に発掘された墓で、詳細は不明である。ティリンスの報告書にこの墓の出土土器の写真が掲載されているが、正式な報告は発表されていない。

1) 中期幾何学文様期 II

2) 不明

3) 不明

4) 土器

少なくとも土器3個が出土している。

5) Frickenhaus, Müller & Oelmann 1912, 134, 136, fig.8, 159, n.4.

6) *PAE 1893*, 1895, 8-9, Wace, Stubbings, Rowe, Desborough & Wace 1954, 265, n.15, Hägg 1974, 66, 69, Foley 1988, 218, Coldstream 2008, 120.

【ライオン門付近の墓】⁽¹⁹⁾

19世紀に発見された遺構で、正式な報告は出されていない。

1) 幾何学文様期

2) 土壇墓？

3) 不明

4) 不明

5) Perrot & Chipiez 1898, 162, n.1.

6) Wace, Stubbings, Rowe, Desborough & Wace 1954, 265, n.16, Snodgrass 1971, 204, Hägg 1974, 66-67, 69, 105.

【博物館周辺地域の墓】

アクロポリスの北側にミケーネの博物館が建設されたが、その周辺一帯から本稿の対象時期の墓が出土している。

・鼎の墓

後期青銅器時代 IIIC 期もしくは亜ミケーネ期と推測されている。この墓に関しては、既に別稿にて言及した⁽²⁰⁾。また同じ調査区域から他にも 6 基の墓が発掘されたが、副葬品は存在せず、年代は不明である⁽²¹⁾。

・工房第 V 号墓

工房（Εργαστήριο, Workshop）と呼ばれている建造物の発掘で発見された。

- 1) 初期幾何学文様期
- 2) ?（土壇墓か？）⁽²²⁾
- 3) 土葬

頭蓋骨は北側に置かれていた。

- 4) 土器 4 個、鉄製ピン 1 本、鉄製短刀の一部、錆びた金属製品 1 個、青銅製指輪 2 個
- 5) Δανιηλίδου 2008, 245, 314, 331-332, 346.

【クリュタイムネストラの墓の東側の墓】

クリュタイムネストラの墓は、城塞から見て東方に位置する後期青銅器時代のトロス墓である。墓内部から幾何学文様期の土器が出土していることは、明記しておく必要があろう⁽²³⁾。

1909 年と 1954 年にギリシアの調査隊によってクリュタイムネストラの墓の東側が発掘され、初期鉄器時代の墓が出土した。ただし情報が錯綜しており、不明な点が多い。

・1909 年の調査で出土した資料

1909 年に発掘が行われ、後期幾何学文様期の埋葬資料が出土したことに関しては諸家の間で異論は提出されていない。ただし墓の数を含めて議論がある。ここでは、時期と文献のみを記しておきたい。

- 1) 後期幾何学文様期
- 5) Εὐαγγελίδης 1912.
- 6) Courbin 1966, 165-166, 175, 177, Snodgrass 1971, 204, Hägg 1974, 66, 69-70, Foley 1988, 42, 217-218, Coldstream 2008, 132.

・1954 年の調査で発掘された墓

同じ場所が 1954 年に再調査され、箱形石棺墓が確認された。ただし内部からは遺骨も副葬品も発見されなかったため、1909 年に調査され、再度蓋をされた墓であった可能性が概報で指摘されている。A. フォーリー (Foley) はこの墓を、1909 年の調査で 2 体の遺骨が葬られていると報告されたものであると判断している⁽²⁴⁾。

1) 後期幾何学文様期？

2) 箱形石棺墓

内部の計測で大きさは $1.46 \times 0.54 - 0.58\text{m}$ 、深さは 0.70m である。

3) 1954 年の調査では遺骨は発見されなかった。ただし、上記の様に、1909 年の調査で 2 体の遺骸が葬られていた墓と同一であると見なす研究者も存在する。

4) 内部からは何も副葬品は出土しなかった。ただし、墓の外から、土器 1 個、高さが 13cm で直径 21.5cm の青銅製容器、青銅製ピン 10 本、鉄製ピン 2 本が発見された。

5) *PAE 1954*, 1957, 268.

6) Snodgrass 1971, 204, Hägg 1974, 66, 69-70, Foley 1988, 42, 217-218.

【先史時代の墓域】

アクロポリス南西部に位置する先史時代の墓域 (Prehistoric Cemetery) は、中期青銅器時代から後期青銅器時代 IIB 期にかけて埋葬が行われた場所である。城壁内部の円形墓域 A は、この先史時代の墓域の一部である⁽²⁵⁾。

この区域から発見された埋葬資料の中には、時期的に大きく隔たりがある初期鉄器時代の墓も発見されている。

・39 号墓

亜ミケーネ期に属するこの墓の一部は、先史時代の墓域の境界のために造られた可能性がある壁の上に、構築されている⁽²⁶⁾。

1) 亜ミケーネ期⁽²⁷⁾

2) 箱形石棺墓

一つの石をくりぬいて作られた箱形石棺墓である。大きさは $0.60 \times 0.50\text{m}$ 、深さは 0.30m 前後である。二個の蓋石で覆われていた。主軸は北西—南東方向である。

3) 土葬

被葬者は幼児 (infant) である。

4) 土器 2 個、ステアタイト製紡錘車

5) Wace, Stubbings, Rowe, Desborough & Wace 1954, 232, 258-259.

- 6) Wace 1954, 170, Desborough 1964, 74, Styrenius 1967, 129, 134, 136, Hägg 1974, 65-66, 150, Hope Simpson & Dickinson 1979, 33, Alden 1981, 119, n.1, Cavanagh & Mee 1998, 98, Mountjoy 1999, 63, Alden 2000, 43.

・ G.I 号墓

G.II 号墓の東側から出土した。

- 1) 後期幾何学文様期 (?) ⁽²⁸⁾
- 2) 土器棺（ピソス）墓
ピソスの蓋は大きな石で塞がれていた。ピソスは高さが 40cm 前後である。
- 3) 遺骨無し
ピソスの中から発見された唯一の遺物は、土器 1 個であると報告されている ⁽²⁹⁾。ということは、遺骨は確認されなかったということであろう。
- 4) 手びねりの土器 1 個
三葉形の口縁部を有するオイノコエで、高さは 16.5cm である。文様はない。
- 5) Wace, Stubbings, Rowe, Desborough & Wace 1954, 232, 265.
- 6) Snodgrass 204, Hägg 1974, 66, 69, Foley 1988, 42, 218.

・ G.II 号墓

39 号墓の東側から出土した。先史時代の墓域の境界を規定していると推測される壁の上に一部のっている。副葬品の出土状況などから、破壊された墓であるのか、被葬者は一人かなど、疑問が呈されている ⁽³⁰⁾。

- 1) 後期幾何学文様期 I ⁽³¹⁾
- 2) 箱形石棺墓
長方形の竪穴の四辺が、板状の石で囲まれている。2 個の大型の石で蓋をされていた。主軸は北西—南東方向である。大きさは 1.80×0.82m、深さは 0.72m である。
- 3) 土葬
被葬者は成人である。頭蓋骨は発見されなかった。
- 4) 墓の外、蓋石の上から、轆轤製土器 9 個と手びねり（hand-made）の土器 5 個が出土した。墓の内部には土器 5 個、鉄製短剣 1 本、鉄製ピン 2 本、青銅製ピン 1 本、青銅でコーティングされた鉄製指輪 1 個、さらに紡錘車が副葬されていた。
墓の外側から出土した轆轤製土器は、内部の土器よりも早い時期であると報告されている ⁽³²⁾。また指輪は指にはめた状態で出土した。

- 5) Wace, Stubbings, Rowe, Desborough & Wace 1954, 232, 260-265.
- 6) Courbin 1966, 13, n.1, 57, n.2, 71, n.3, 177, Snodgrass 1971, 204, Hägg 1974, 66, 69, Foley 1988, 42, 218, Coldstream 2008, 125.

【円形墓域 B 南の墓】

1950 年代に、円形墓域 B の南側から 3 基の墓が発掘された。この 3 基が小規模な塚を形成していた可能性も指摘されている⁽³³⁾。

・ *PAE 1953* に報告された墓

- 1) 原幾何学文様期
- 2) 単葬墓 (形は不明)
大きさは 1.10×0.60m である。
- 3) 土葬、屈葬
- 4) 土器 1 個
言及されているのは土器 1 個のみである。
- 5) *PAE 1953*, 1956, 209.
- 6) Snodgrass 1971, 204, Hägg 1974, 66-68, Lemos 2002, 160⁽³⁴⁾ .

・ *PAE 1954* に報告された墓

- 1) 不明
- 2) 単葬墓 2 基 (形は不明)
大きさに関しては、2 基とも小さいと報告されている。
- 3) 土葬
被葬者は 2 基とも乳児である。
- 4) 1 基の墓からは、小型の青銅製ピンが発掘された。
- 5) *PAE 1954*, 1957, 265.
- 6) Snodgrass 1971, 204, Hägg 1974, 66-68.

【アクロポリス下方域出土の墓】

アクロポリスの下方向に位置する調査区域 (Κάτω Πόλη, Lower Town) から⁽³⁵⁾、2008 年に発見された。

- 1) 中期幾何学文様期
- 2) 積石箱形石棺墓
- 3) 土葬、屈葬
- 4) 土器 5 個、鉄製指輪、ピン
- 5) *Ergon 2008*, 2009, 39-40.
- 6) *AR 2008-2009*, 2009, 19, 22, fig.28.

【象牙の家の墓】

象牙の家（Ivory Houses）はアクロポリスの西方、円形墓域 B よりも南側に位置する建造物群である。西の家（West House）、油商人の家（House of the Oil Merchant）、盾の家（House of Shields）、スフィンクスの家（House of Sphinxes）から構成されている。これらの遺構の内、盾の家とスフィンクスの家から初期鉄器時代の墓が発掘されている。

また西の家に関しては、幾何学文様期における人的活動の痕跡や土器片が報告されている⁽³⁶⁾。

・盾の家の PG601

盾の家の西側の部屋の床を掘り込んで作られていた。

- 1) 原幾何学文様期
- 2) 箱形石棺墓

大きさは 1.40×1.00×0.35m である。礫や石で覆われていた。主軸は北西—南東方向である。

- 3) 土葬、屈葬

被葬者は成人である。

- 4) 土器 2 個、鉄製ピン、石製紡錘車
- 5) Wace, Stubbings, Rowe, Desborough & Wace 1954, 235, 259-260.
- 6) Snodgrass 1971, 204, Hägg 1974, 66-68, Kilian-Dirlmeier 1984, 80, no.317, Tournavitou 1995, 17, Lemos 2002, 13, 60, 82, 160, 233.

・盾の家の PG602

盾の家の北西の隅から発見された。

- 1) 原幾何学文様期
- 2) 土壙墓
- 3) 3 名の土葬、一体は仰臥屈葬

若い女性の遺体が仰臥屈葬の姿勢で葬られていた。さらに 6～7 歳前後の子供の遺骨も発見された。

- 4) 土器 2 個
- 5) Wace, Pakenham-Walsh, Taylour, Woodhead, Desborough & Taylor 1955, 240-241.
- 6) Snodgrass 1971, 204, Hägg 1974, 66-68, Tournavitou 1995, 17, Lemos 2002, 78, 160.

・盾の家の G603

- 1) 初期幾何学文様期 I
- 2) 積石箱形石棺墓もしくは配石土墳墓⁽³⁷⁾
- 3) 土葬、仰臥屈葬
被葬者は 23 歳前後の人物である。
- 4) 轆轤製土器 9 個、手びねりの土器 1 個、青銅製ピン 2 本、青銅製指輪 3 個、青銅製リング（イアリング？） 3 個、青銅製フィブラ 1 個
- 5) Wace, Pakenham-Walsh, Taylour, Woodhead, Desborough & Taylor 1955, 241-245.
- 6) Courbin 1966, 13, n.1, 177, Snodgrass 1971, 204, Hägg 1974, 66, 70, Tournavitou 1995, 17, Coldstream 2008, 113-114.

・盾の家の G604

- 1) 初期幾何学文様期 II
- 2) 土墳墓
主軸はほぼ北－南方向である。
- 3) 2 名の土葬、屈葬
双方の遺体とも、頭部は北側に位置している。西側の遺骸は 45 歳前後の男性で、東側は 30 ～ 35 歳前後のおそらく女性と報告されている。
- 4) 轆轤製土器 3 個、手びねりの土器 1 個、青銅製ピン 2 本、青銅製指輪 2 個、鉄製ナイフの刃 1 個、棒状鉄製品 1 本
東側の遺体は左手に青銅製の指輪を 2 個はめており、両肩に 1 本ずつ青銅製のピンが置かれていた。
西側の遺体の頭蓋骨の下からは、鉄製のナイフの刃 1 個と両端が尖った棒状鉄製品（shaft or pin）1 本（9.5cm）が発見された。
- 5) Wace, Pakenham-Walsh, Taylour, Woodhead, Desborough & Taylor 1955, 245-247.
- 6) Courbin 1966, 13, n.1, 165, 177, Snodgrass 1971, 204, Hägg 1974, 66, 70, Tournavitou 1995, 17, Coldstream 2008, 115.

・盾の家の Grave IV

- 1) 不明
- 2) 不明
- 3) 不明
- 4) 不明
- 5) 執筆時点においては不明
- 6) Tournavitou 1995, 17.

・スフィンクスの家近辺の G605

スフィンクス家のすぐ西側から 1955 年に発掘された墓である。

- 1) 後期幾何学文様期
- 2) 土壙墓？⁽³⁸⁾
- 3) 土葬

被葬者は子供である。遺骨は岩の上に置かれており、また遺存状況は悪かった。

- 4) 土器 1 個、青銅製ピン 2 本
青銅製ピン 2 本は、胸部の上に置かれていた。
- 5) Wace & Desborough 1956, 116, 128-129.
- 6) Hägg 1974, 66, 70, Foley 1988, 42, 218.

・スフィンクス家の PG606

1955 年の発掘で出土した。

- 1) 原幾何学文様期
- 2) 積石石棺墓

大きさは内部の計測で 0.79×0.42m である。大型の石 3 個で蓋をされていた。

- 3) 土葬、屈葬
頭蓋骨は西側に置かれ、顔面はおそらく北を向いていた。
- 4) 墓の内部からは土器 1 個と、その土器の中から発見された青銅製リングが出土した。さらに墓の外側からは、土器 3 個、おそらくランプと推察される最大高 2.4cm の土製容器 1 個、小型の石 24 個が発掘された。
- 5) Wace & Desborough 1956, 116, 129-130.
- 6) Snodgrass 1971, 204, Hägg 1974, 66-68, Tournavitou 1995, 57, Lemos 2002, 22, 76, 87, 89, 92, 116, 160, 233.

・スフィンクス家の G607

1959 年の発掘で、G606 の 2m ほど離れた場所から発見された。

- 1) 初期幾何学文様期 II
- 2) 箱形石棺墓

主軸は西—東方向である。内部の計測で大きさは 1.78×0.68m、深さは 0.60m である。

- 3) 土葬、仰臥屈葬
被葬者は 19 歳前後の女性である。頭蓋骨は墓の西部に置かれていた。
- 4) 土器 26 個、青銅製指輪 1 個、青銅製ピン 2 本、青銅製イアリング 1 個
イアリングは左耳の近く、指輪は左手の上、ピンの 1 本は右肩の上、

別の1本は頭蓋骨の一番上に置かれていた。

5) Desborough 1973, 87-91.

6) *AR 1959-1960*, 1960, 9, *BCH* 85, 1961, 664, Courbin 1966, 172, 177, Hägg 1974, 66, 70, Coldstream 2008, 115-117.

【パナギアの家墓】

パナギアの家 (Panagia Houses) はアクロポリスから南西方向に 400m ほど、またアトレウスの宝庫の羨道からは 60m 前後北に位置するミケーネ時代の建造物群である。後期青銅器時代 IIIB 期の終末まで、さらにもしかしたら IIIC 期の初めまで、使用されていた⁽³⁹⁾。

このパナギアの家から埋葬資料が発見されており⁽⁴⁰⁾、そのうち少なくとも 2 つがおそらく初期鉄器時代に属すると推測されている。

また概報でさらに別の墓が原幾何学文様期であると報告されたことがあるが、副葬品は出土しておらず、時期を特定できる根拠は存在しない⁽⁴¹⁾。そのためここでは除外することとする。

・家屋 I の庭 (=部屋 1) の墓：南側

家屋 I (House I) の庭は部屋 1 (Room 1) と名付けられており、そこから出土した二基の墓の内、南側の遺構である。

1) 原幾何学文様期?⁽⁴²⁾

2) 土壌墓もしくは配石土壌墓⁽⁴³⁾

主軸は西—東方向もしくは東—西方向である。

3) 土葬

被葬者は子供である。

4) 鉄製ピン 1 本、円錐状石製品 (stone conical button) 2 個

円錐状石製品はネックレスとして使用された可能性が指摘されている⁽⁴⁴⁾。

5) Mylonas Shear 1987, 3, 16, 70, 117, 119, no.171, 134, nos.249 & 250.

6) *Ergon* 1963, 1964, 70, *AR 1963-1964*, 1964, 8, *BCH* 88, 1964, 725, *PAE* 1963, 1966, 104, *AD* 19, B'1, *Chronika: 1964*, 1966, 133, Hägg 1974, 66-68, Lemos 2002, 160.

・家屋 I の庭 (=部屋 1) の墓：北側

家屋 I の庭は部屋 1 から出土した二基の墓の内、北側の遺構である。

1) 原幾何学文様期?⁽⁴⁵⁾

2) 土壌墓

主軸は西—東方向もしくは東—西方向である。

3) 土葬

4) 鉄製ピン2本、青銅製のらせん状リング2個

青銅製のリングは頭蓋骨のそばから出土しており、髪の毛のためのものと報告されている (pair of bronze hair rings)⁽⁴⁶⁾。

5) Mylonas Shear 1987, 3, 16, 70, 117, 119, nos.172, 173, 174 & 175.

6) *Ergon* 1963, 1964, 70, *AR* 1963-1964, 1964, 8, *BCH* 88, 1964, 725, *PAE* 1963, 1966, 104, *AD* 19, B'1, *Chronika*: 1964, 1966, 133, Hägg 1974, 66-68, Lemos 2002, 160.

*家屋 I の庭 (=部屋 1) の墓二基の副葬品に関する註記

上記は Mylonas Shear 1987 の報告から記載したが、G. ミロナス (Mylonas) による概報では異なることが記されている。

それによると、二基の内一基は原幾何学文様期の土器、鉄製ピン2本、青銅製イアリングが副葬されていた、別の一基からは鉄製指輪1個、青銅製指輪1個、鉄製ピン1本が出土した、という⁽⁴⁷⁾。

註

- (1) Desborough 1973, 99. Cf. Ιακωβιδης 2006, 1.
- (2) 土器が出土した 1 基は原幾何学文様期であるが、他の墓もすべて原幾何学文様期であるか否かは不明である。
- (3) 下記の記述から、箱形石棺墓と判断した。“ἐκ πλακῶν ἐκτισμένοι καὶ ὁμοίως κεκαλυμμένοι” (EA 1891, 1891, 27).
- (4) EA 1891, 1891, 27.
- (5) EA 1891, 1891, 27.
- (6) 部屋 of 名称に関しては、Ιακωβιδης 2006, 7. ただし、当初は部屋 VIII と報告されていた (PAE 1984, 1988, Παρένθετος Πίναξ ΣΤ’).
- (7) Ιακωβιδης 2006, 27.
- (8) 概報では異なる見解が提示されている (“κιβωτιόσχημος ΜΕ τάφος”, PAE 1984, 1988, 236).
- (9) 城塞の家が建造される以前、この墓が発見された一帯は、中期青銅器時代には墓域であった (Taylour 1981, 45).
- (10) デズボロによれば、亜ミケーネ期の終末期の可能性も否定できないが、原幾何学文様期の可能性の方が高いという (Desborough 1973, 92)。原幾何学文様期に分類している研究者が多い (Hägg 1974, 68, 114, Lemos 2002, 160, n.115)。
- (11) 墓の蓋および側壁の石も火を受けているので、(二次的な) 火葬ではないであろう。
- (12) Desborough 1973, 92.
- (13) Kilian-Dirlmeier 1984, 80, no.317A, pl.12:317A.
- (14) “cist grave” と表記している文献も存在するが (Taylour 1981, 37)、“earth-cut tomb” と報告されている (Desborough 1973, 92)。
- (15) Desborough 1973, 91.
- (16) Taylour 1981, 37.
- (17) マウントジョイは亜ミケーネ期 (Mountjoy 1999, 62)、一方でレモスは亜ミケーネ期から原幾何学文様期への移行期 (Lemos 2002, 13, 233) と判断している。
- (18) “Cist tomb: three large slabs formed the cover, the sides were lined by smaller coursed stones,...” (Desborough 1973, 94).
- (19) 場所に関しては、Hägg 1974, 67 を参考にした。
- (20) 拙稿 2015, 84-85.
- (21) Onasoglou 1995, esp.145-146.
- (22) Cf. Δανιηλίδου 2008, pls.58:a, b, 60:a, b.
- (23) Mason 2013, 98.
- (24) Foley 1988, 215-216. さらに、cf. Hägg 1974, 69, n.256.
- (25) Alden 1981, 119-121, Mountjoy 1999, 63.
- (26) Wace, Stubbings, Rowe, Desborough & Wace 1954, 258.
- (27) この墓の時期に関しては、研究者によって意見が分かれている。後期青銅器時代 IIIC 期という意見 : Wace 1954, 170, Cavanagh & Mee, 1998, 98, Alden 2000, 43. 後期青銅器時代 IIIC2 期という意見 : Wace, Stubbings, Rowe, Desborough & Wace 1954, 258-259. (ただし現在では後期青銅器時

- 代 IIIC2 期という区分は一般に用いられない。) 亜ミケーネ期という意見 : Styrenius 1967, 129, 134, Hägg 1974, 65, Mountjoy 1999, 63.
- (28) 次の G.II とほぼ同時期と推測されている (Wace, Stubbings, Rowe, Desborough & Wace 1954, 232, 265)。
- (29) Wace, Stubbings, Rowe, Desborough & Wace 1954, 232, 265.
- (30) Wace, Stubbings, Rowe, Desborough & Wace 1954, 263.
- (31) この墓の時期を後期幾何学文様期 I と記載している文献として、Foley 1988, 218. さらにこの墓の内部から出土した土器の時期を後期幾何学文様期 I と記している文献として、Coldstream 2008, 125.
- (32) Wace, Stubbings, Rowe, Desborough & Wace 1954, 263.
- (33) *PAE* 1954, 1957, 265.
- (34) 「トロス墓 B の南」と記されているが、「円形墓域 B の南」の間違いである。また註 117 に、「*Praktika* (1954)」と記載されているが、正しくは「*Praktika* (1953)」である。
- (35) アクロポリスとこの調査区域との位置関係が分かる写真として、*Ergon* 2007, 2008, 33, fig.27.
- (36) Tournavitou 2006, 232, 267.
- (37) “a poorly constructed cist with stones surrounding it” (Wace, Pakenham-Walsh, Taylour, Woodhead, Desborough & Taylor 1955, 241).
- (38) 写真 (Wace & Desborough 1956, pl.33a) では、土壇墓のように見える。
- (39) Shear 1987, 157.
- (40) Cf. Mylonas Shear 1987, 3, 28, n.10, 43, n.72, 70, n.12.
- (41) *PAE* 1963, 1966, 106. さらに、cf. *Ergon* 1963, 1964, 71.
- (42) 時期に関しては、矛盾した記載が見受けられる。Cf. Mylonas Shear 16, 70.
- (43) 墓に関する詳細な記載はない。図面からそのように判断した。Cf. Mylonas Shear 1987, plan.
- (44) Mylonas Shear 1987, 134, no.249.
- (45) 時期に関しては、矛盾した記載が見受けられる。Cf. Mylonas Shear 16, 70.
- (46) Mylonas Shear 1987, 119, nos.174 & 175.
- (47) *PAE* 1963, 1966, 104, *AD* 19, B'1, *Chronika*: 1964, 1966, 133. Cf. *Ergon* 1963, 1964, 70.